

新ちゃんはいっつ見かけても独り言を云っていた。往来を歩きながら早口に何かつぶやき、自分にだけ見えているらしい相手をなだめるように両手を宙に泳がせて、時には何かを思いつ出すのかホウホウホウと含み笑いをした。

町内の誰も「新ちゃん」と呼ぶのでぼくも自然にそう呼んでいたけれど、新ちゃんは子供ではない。あれで当時四十歳は過ぎていたのではないだろうか。その年の春、国民学校三年生になったばかりのぼくから見れば、図体だけは立派な大人であった。髪も髭も伸ばし放題で、濃い眉の下の牛のように大きな眼はいつも血走っている。夏でも冬でも、垢じみて模様もはつきりしなくなつた着物一枚を素肌にとつただけで、紐のようになった帯をいい加減に結んでいたので、たいてい前がはだけて毛深い布袋腹が覗いていた。土埃で染まつた足はいつも草履ばきであった。

見ていると、道端に落ちていた木片を拾い上げて、さも仔細ありげに眺め入り、その拳匂ふと鼻に当てて嗅いでみたりする。たまに誰かが話しかけることがあつても新ちゃんは振り向きもしない。袖をつかまれてもあらぬ方に眼をやって意味の汲み取れないことを咳くだけで振り払おうともしない。道で立ち話をしている親の手を離れてよちよち歩み出てきた幼児に通せんぼをされると、新ちゃんは棒立ちになっていつまでも待つている。格別困つた顔をするでもなく腹を立てる様子もない。まわりの人も事物も、一切を無視してひたすら考え込んでいるようにも、また祈っているようにも見えた。

今どきだつたら周囲がうるさくて、こんな異様な人物が野放しになっているのは到底許されないだろうが、昭和二十年、戦禍から遠く、穏やかな戦前の雰囲気を残した山陽の城下町には実際こんな人物が居たのである。町内の人々から排斥されもしなかつたのは、新ちゃんが決して他人に危害を加えることのない、いわば人畜無害の存在であつたからではあるうが、ほかに理由というか、特別の事情があつたのかもしれない。いずれにしてもそれは当時のぼくの知らないことであつた。

新ちゃんの家はその頃まだ城跡の周辺にいくらかも残っていた侍屋敷のひとつであつた。侍屋敷といつても上級藩士のものではないから、広くもないし古びてもいた。それでも瓦屋根を載せた土塀を周辺にめぐらせて、簡素ながら萱葺きの門を構えたところは風格があつた。土塀の上には夏蜜柑の葉が青く茂っていた。

母一人子一人という話であつた。新ちゃんのお母さんを道で見かけることはなかつたが、門の開いている時、通りがかりに玄関に背筋の伸びた細面の老婦人を垣間見ることがあつた。真っ白い頭を総髪に結び上げて着物姿がきちんとしていた。風体こそ異様だつたが新ちゃんはぼくらにはお馴染で、ちつとも恐ろしいとは思わなかつたが、たまに見かける白

髪のお婦人は何か近寄り難くて一寸怖いところがあった。

その頃、ぼくは学校で先生からアメリカ兵の話聞いた。サイパン島上陸後、彼等は重傷を負って動けない日本兵を地面に並べておいて次々に戦車で轢き潰したという。ぼくは戦車のキヤタピラが自分の身体にのしかかって来るのを想像して総毛立った。想像したアメリカ兵は本当に鬼の姿をしていた。実際にはまだアメリカ人を見たことがなかったのである。

四月、沖縄に米軍が上陸した。本土の大都市は空襲で殆ど壊滅し、次第に中小都市にそれが及ぼうとしていた。基地も大きな軍需工場もない城下町でも頻繁に敵機の接近を告げる警戒警報が出されるようになった。サイパン島から飛来するB29の編隊は室戸岬か潮ノ岬を目標に北上して来る。彼等は瀬戸内の城下町など見向きもせず、たいてい阪神か北九州に向かうので、まもなく警報は解除になるのが常だったが、時にはすぐ続いて空襲警報に切り替えられることもあった。犬の遠吠えのようなのんびりとした警戒警報と違って空襲警報のサイレンの切迫した響きは体がこわばるほど怖かった。一切の物音が絶えて異様に静まりかえった街にあわただしくサイレンが唸り始めると、ぼくらは一斉に防空頭巾を被って地域毎の班に分かれ、近所の六年生に引率されて家に帰された。帰ったところでぼくの家には祖母がおるおろしているだけなのだが。

もし爆弾が落ちて来たらすぐに地面に伏せて口を開き、左右の拇指を耳の穴に固く差し込んで四本の指は揃えて眼窩を押さえる。そうしておけば爆風で鼓膜が破れることもなく眼球も跳びださないと教えられてぼくらは何度も練習した。母の作ってくれた防空頭巾を被ると、頭から掛け布団を被って眼だけ覗かせている感じで落ち着く。ぼくは前を駆ける下級生の踵を見詰めて懸命に走って帰った。時には機影も定かでないほど遙かな高空を白い飛行機雲が一筋、二筋真つ直ぐに伸びて行くのを見ることもあった。偵察機でもあったのであろうか、それがぼくの初めて遭遇する敵であった。青空に次第に溶ける飛行機雲をぼくは美しいと思った。

いま慶応三年刊の城郭図を見ると、空襲で焼失する前のぼくの家あたりには本丸の西南方を護る内濠が描かれている。今も残る石垣と照合すると廃藩後に濠を埋め立てて出来た家並みだったらしい。あるいは打ち壊した城郭の土くれや廃材の捨て場だったのかも知れない。

ぼくの家のおすぐ裏には花崗岩の石垣が迫っていて、厠の小窓ごしに見上げると二階の軒よりも高く漆喰塗りの土塀が遙か向こうまで連なっていた。所々に鉄砲狭間の空けられた白い塀の上には榎の巨木が盛りあがるように茂り、風の強い日の梢のざわめきとその揺れるさまは恐ろしい様であった。

家の近くには埋め立てを免れた濠が三箇所残っていたが、運動場ぐらいの広さの濠は、どれもが二方か三方を高い石垣に囲まれほとんど水面もみえないほど蓮や水草が生い繁っ

て暗鬱なところであった。いつもウシガエルの咆えるような鳴き声が響いていた。

五月のある日の午後、ぼくは濠端に居た。

濠端のあたりで独りで遊ぶことは禁じられていたが、ぼくはもう幼児ではないし、何が本当に危険なことかぐらいの判断は出来ると自負していたから平気であった。はじめ小石を投げ込んで水面のミズスマシに爆撃を加えたぼくは、その日に限っていくら待っても遊び仲間の来ないのに退屈し、裸足になって石垣を伝い水面まで降りた。

三メートルばかり向こうにヒシの実採りに使う大きなたらいが浮いている。手前の水面に杭が一本頭を覗かせていて、それに結んだ綱さえ手に取ればたらいを引き寄せるのはわけはない。しかし何かに引っかけたかたらいは途中までしか近寄って来なかった。たらいに乗ってどうするという確とした目的があるわけではないが、それでも気になる。ぼくは暫くためらって結局跳んだ。

斜めになった石垣の水際からたらいの安定を壊さないように跳び移ることはやっぱり難しく、しまったと思った時にはぼくは横倒しになろうとするたらいの縁を掴んだまま一緒に水しぶきをあげていた。思いのほか水が冷たいのと、口も鼻も泥臭い藻の臭いで一杯になった不愉快と、そして何よりも暗く澱んだ濠の底の得体の知れない何かが、足を握って深みに曳き込もつとしているという恐怖から、ぼくはパニックに陥った。せつかく掴んでいたたらいからも手を離してしまつて滅茶苦茶にもがくしかなかった。

臭い水をしたたか呑んで何度目かに浮き上がったぼくは不意に襟首を掴まれて石垣まで引き寄せられた。

「ホラ、石につかまれ・・・」

日なたの温もりの残る石垣にしがみついて振り向くと、そこには着物のまま肩まで水に漬かった新ちゃんの髟面があつた。

新ちゃんと眼が合った時、不思議な気がした。いつもの鈍い、焦点の定まらない眼ではなくて、まともにぼくを見詰めている新ちゃんの眼は活き活きとして尋常の人のそれであつた。

濠端に這い上がったぼくは後から来る新ちゃんに手を貸そうとしたが、新ちゃんはぼくの小さな掌をぼんと叩いただけで相手にせず、全身から水をしたたらせながら独りでひよひよいと登つて来た。何をすべきかを良くわきまえた敏捷な動きであつた。ぼくはなんとか感謝の気持ちを表したくて、

「有難う、新ちゃん」

と云つてみた。何だかいつもの新ちゃんではないから、無視される筈はないという気がしていた。新ちゃんは顔を両手で拭きながら、

「ああ、間に合つてよかった」

と云つて笑つた。乱雑な歯が黄色くて汚い。

今まで新ちゃんの言葉が理解出来たことは一度も無かつた。面と向かつて話をしたこと

も勿論ない。しかし今の新ちゃんは違う。

「坊、そのまま帰ると叱られるだろう」

「うん」

「ここで着物を乾かしてから帰れ。それからな、助けて貰うたことは誰にも云うんじやないぞ・・・いいか、約束だぞ」

ぼくが裸になって濡れたシャツやズボンを絞り、いっばいくつついた水藻をつまみ取っているうちに、新ちゃんも着物を絞ってそのまま着てしまった。

ぼくはどう考えても不思議だった。

新ちゃんは頭が弱いということになってきているけれど、ほんとうはそうではないのかも知れない。気狂いのふりをしているだけかもしれない。そうだとしたら一体何のためだろう。それにまた、何故間に合うように来る事が出来たのだろう。ぼくが跳ぶ時、まわりにひとの気配は無かった。その直後に新ちゃんが濠端の道を通りかかったにしても、低い水面で溺れているぼくが道からすぐに見通せる筈はないのだ。

そのまま去りかけた新ちゃんにぼくは大急ぎで尋ねてみた。

「新ちゃん、どこから来たの・・・」

新ちゃんはちよつと足を止めたが何もいわなかった。そして三の丸の石垣に沿って曲がって見えなくなるまで一度も振り返らなかった。歩き方も後姿もいつもの新ちゃんであった。

母に云えば叱られるのは判っていたし、約束を守ることがせめてもの感謝の証のような気がして、ぼくは濠で溺れたことを誰にも話さなかったが、翌日もう一度礼をいいたくて、学校から帰るとすぐに新ちゃんの家へ跳んで行った。礼にかこつけてもついちど新ちゃんと話して見たかったのである。

新ちゃんは居なかった。こっそり覗いた玄関に草履が見えない。待っているうちに降りはじめた雨が次第に本降りになり、両側に土塀の続く屋敷町の道に幾筋もの川が出来る頃になってやっと新ちゃんは帰って来た。いつものように手ぶらで傘など無いが濡れることなど意に介してはいない。ぼくが見えない筈はないのに、昨日と違って新ちゃんは眼を中空に据えていて視線が合わない。足許に盛大に飛沫をとばしながらやってきて、傍に立ち尽くすぼくには眼もくれず潜り戸をくぐって後ろ手に板戸を閉めてしまった。まったくいつもの新ちゃんであつてとても礼を言うどころではなく、ぼくの疑問もそのまま残った。

昭和二十年六月二十八日になった。

陽が落ちてだいぶ時が経ち、天頂には名残の青い色が僅かに残っていたが路地はずでにほの暗く、人通りはとつくに無い。帰宅の遅い母を待つてぼくはまだ戸外に居た。灯火管制で街灯も門灯もいっさい点かない街は日暮れとともに本当に真っ暗になる。傍の銀杏の梢でねぐらを争って大騒動をしている雀に気をとられて、近寄ってくる足音に気が付かなかったぼくは不意に眼の前に黒い人影を感じてびっくりした。新ちゃんであった。

「坊、今夜は早く帰って逃げる用意をしておくんだぞ」

「逃げる用意・・・どうして」

「火が降ってくる。お城が燃える、家も燃える」

「ほんと」

「ほんとうだ」

「でも、どうして新ちゃんに判るの」

新ちゃんは手を伸ばしてぼくの坊主頭を撫でた。暗くて表情は見えない。

「・・・どうしても判るんだよ、ひとりで」

「新ちゃんも逃げるの」

「逃げる」

「どこに」

新ちゃんは黙ったまま振り返って北の空を指した。天守閣の方向である。新ちゃんの肩の向こうの黒い雲の間に一筋、水色の空が残っていた。

新ちゃんはそのまま歩き出した。突き当たって右折すれば新ちゃんの家のある内山下、反対に左に曲がれば緩い登り坂にかかって石山門から大手門に向かう道である。ぼくが眼を凝らして見ていると新ちゃんの影は宵闇の中を左に曲がって消えた。

逃げる用意はいつもしてある。

布袋に二合ほどの煎り豆、小瓶に塩と砂糖が少量づつ、新しい帳面二冊とまだ削ってないHBの鉛筆が一本、それと新学年になって友達になった中之町の靴屋の娘から貰った琥珀色の松脂の塊などの貴重品がリュックサックに納まって枕元にある。松脂が靴を作る工程でどう使うものなのか教えて貰った筈だけれど忘れた。透明で黄金色の大きな飴のようなそれはとても綺麗で、ぼくにとってはこれこそ当面の貴重品の最たるものであった。それを背負って母の作ってくれた防空頭布を被ればいつだって逃げられる。

でも、火が降ってくるのが空襲のことらしいとは思っただけで、もうひとつ納得出来ていない。空襲といえば爆弾か焼夷弾が落ちてくるもので火が降ってくる筈が無いと、ぼくはそんなことにこだわっていた。そしてまた、それが今夜だということにも当惑していた。新ちゃんの警告を母に話すとすれば、話の運びで濠で溺れたことに触れなくてはならなくなるかもしれないが、今まで匿していたのだからそれはちよつとまずい。親としては息子を救って貰った礼をしないまま過ぎたのは許されないといいことになって、事態は紛糾するに決まっている。父は伍長勤務上等兵とやらになってどこか南方で戦争をしている。もし父が出征しないで家にいたとしても、こっちに叱られるのはもっと怖いから、やっぱりこの話は持ち出せなかっただろう。で、その夜、母には何も話さなかった。もし新ちゃんが空襲を予告しているといったところで、母がそれを信じたかどうかは判らない。

「空襲よツ、起きなさいツ」

ぼくは母に激しく揺り起こされた。この時の、初めて聞く母の鋭い声音は四十七年経った今も耳もとに残っている。

家から跳び出したぼくたちは頭上遙かに高く無数の火箭がいくつにも分裂しながら降り注いで来るのを見た。全天が激しい驟雨の時にも似てザーツという荒い轟音に充ち、赤く染まって逃げ惑う人々のざわめきを圧倒していた。はじめ、見上げている自分を目がけて直撃して来ると思われた火の塊は、二度三度と飛び散り数が増えるとともに一斉に斜めに流れてそれゆく。

新ちゃんが火が降るといったのは嘘でも誇張でもなかった。城下町の八割を焼き尽くした空襲は六月二十九日午前二時に始まった。B29七十機の来襲だったという。その夜に限って警報は発令されなかった。

眼も眩む白熱光を放射して炸裂する焼夷弾と火災に追われて、母とぼくは手を曳きあつて城の北郭をめぐる川堤に逃れた。まじかに仰ぐ五層の天守閣は一斉に格子窓から濃い煙を噴き出し、最上階は既に赤黒い焰に包まれようとしていた。

夜空に濃淡の煙が渦巻き流れ、その上を銀色の巨大な飛行機がゆっくり滑ってゆく。地上の火焰が反映して翼も胴も赤い。川に落ちた油脂焼夷弾は消えるどころか四散して川面一杯に青白い焰を拡げ燃えながら流れてゆく。火勢が強くなるとそれが風を呼び、川面の火焰も渦巻く。もうどこにも逃げる所は無い。母とぼくは石の河原に抱き合っただけで、出来るだけ小さくなって煙と熱風を避けた。炎の川になつた対岸には天守閣が天に沖する大火焰を上げていた。真っ赤に熾った炭火で組みあげたようになりながら、五層の城はそれでもまだ崩れ落ちないで暫く聳えていた。ぼくは大天守炎上を眼前にして戦慄しながら、新ちゃんとお母さんはどうしただろうかと思えばかり考えていた。

(神奈川新聞 一九八二年十二月二十六日)